

シンポジウム

② チベット仏教におけるところとからだ

アティ・ゾクチェン研究所 所長

永 沢 哲

チベットは8世紀から13世紀にかけ、インド、パキスタン、中国、ペルシアをはじめとするアジア諸国から、密教を中心とする仏教と伝統医学を、たいそう旺盛に移植しました。それらの融合から生まれたチベット医学は、理論の骨格の中心に、仏教の意識・生命論をすえています。医師として大成するには、密教の修行が必要だと考えられてきました。

一方、長期の孤独な隠棲修行にあたっては、医学の基礎を学んでおくことが、望ましいと考えられています。

今回の講演では、医学が対象とする「粗大な身体」、ヨーギたちの修行にかかわる「微細な身体」、「光の身体」について、それぞれと心のつながりはどのようなものか、またチベットの仏教と医学が、現代人のウェルビーイングに果たしうる役割はどのようなものか、ごいっしょに考えたいと思います。